

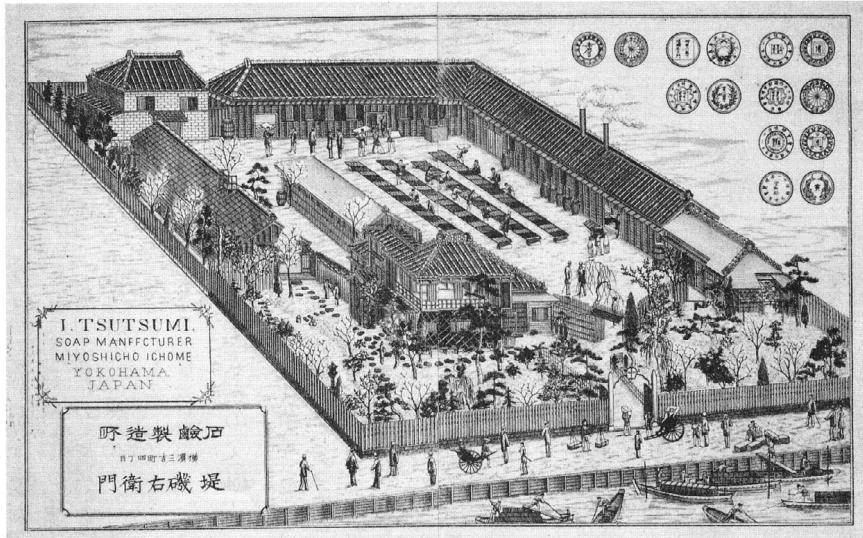
NEWS

「開港のひろば」

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会
発行日／平成8年10月30日（水）

Number
54

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
印 刷／中川印刷株式会社



堤石けん製造所全景

堤磯右衛門は、明治六年（一八七三）に民間では日本で最初に石けん製造に成功したと伝えられる人物である。彼は天保四年（一八三三）に現在の横浜市磯子区の海岸部に位置する磯子村に生まれ、開国・開港という激動の時代に青春を経験している。また、彼は慶応年間から明治初年にかけて幕府が創設した横須賀製鉄所（造船所のこと）で当時は製鉄人としてかかわり建設資材の調達や職人・大工の監督などに従事した人物でもある。

企画展



堤磯右衛門（1833～1891）

この写真は幕末期のものであろうか。
腰には脇差がみえ、頭は丁髷である。

堤磯右衛門は、その時代の一大人物であり、展示では彼の人生を紹介することによって、「国際化」や「近代化」が進展する中で、横浜の人びとがどのように「国際化」や「近代化」にかかわっていったのかを考え直してみると、彼の経験が参考になる。なお、磯子衛門に関しては、御子孫の家（磯子区、堤芳正氏）に関係史料（本誌の二・三面を参照）が残されており、展示ではこうした史料を出品していただいた。堤芳正氏に紙面を借りて感謝したいと思う。（西川武臣）

明治維新後は政府の命令により東京湾内の灯台で使用される点灯用油（菜種油）の製造や横須賀製鉄所の建物に使われるレンガの製造に着手していった。その後、明治六年に石けん製造に成功したことは先に述べた通りであり、彼の製造する石けんは国内だけでなく遠く海外にまで販売されるようになった。こうして、彼は日本を代表する企業家へと成長し、堤石けんは日本の「近代工業」の先駆者になつていった。

ところで、幕末から明治初年の日本を特徴づける言葉に「国際化」や「近代化」があるが、こうした「国際化」や「近代化」を担つたのは著名な政治家や中央の大商人・企業家だけではなかった。横浜は西洋社会との出会いの場であり、旧来から横浜に居住していた人びとはさまざまなかたちで西洋の技術や文化とかかわっていくことになった。

堤磯右衛門は、その時代の一大人物であり、展示では彼の人生を紹介することによって、「国際化」や「近代化」が進展する中で、横浜の人びとがどのように「国際化」や「近代化」にかかわっていったのかを考え直してみると、彼の経験が参考になる。なお、磯子衛門に関しては、御子孫の家（磯子区、堤芳正氏）に関係史料（本誌の二・三面を参照）が残されており、展示ではこうした史料を出品していただいた。堤芳正氏に紙面を借りて感謝したいと思う。（西川武臣）

「石けん工業の創始者、堤磯右衛門の生涯 出品資料について — 堤家の蔵の中から —

横浜開港資料館が堤家の所蔵する資料の調査に着手してから既に十数年の歳月が流れている。この間、当資料館では御当主である芳正氏の協力を得て、約三千点の資料の整理を行ない、資料目録（『横浜市史料所蔵目録』第一二編所収）を作成して紹介している（『横浜開港資料館紀要』第五号・一三号・一四号）。

ところで当資料館では開館以来、市内の旧家が所蔵する古記録・古文書の調査を続けてきた。その結果、現在では多くの貴重な資料の所在が確認されている。しかし、横浜といふ都市は震災・戦災によって多大の被害を受けている上、高度成長の過程で都市化が著しく進んだため、一軒の家から数千点もの資料が発見さ

れることは大変少ない。

そういう意味では堤家が所蔵する資料は横浜の歴史を知るための貴重な文化財であるといえる。特に、今回の展示で取り上げる堤家十代の当主磯右衛門に関する資料は内容からみても興味深いものが多く、幕末から明治初年の「農民群像」や横須賀製鉄所の建設、石けん工業の創設などについて具体的に知ることのできる重要な資料群の一つである。

外国人との交流

そのいくつかを紹介してみよう。

磯子村は開港場に隣接する地域に位置していたため、横浜開港後、しばしば外国人が訪れたようである。また、その折に外国人が堤家に残した絵が現在も残っている（①）。この絵は万延元年（一八六〇）九月一日

に外国人が磯子村にやって来た時に

外国人が描いた鶏と卵の絵である。

この日、一二、三人の外国人一行

は、一艘の船に乗って磯子村に上陸し食事をしたいと身振りで頼んだと記されている。また、外国人たちは白米を見つけ炊き出しを要求したとある。さらに、外国人は筆を借り和紙の上に鶏と卵の絵を描き、卵が欲しいと磯右衛門に示したのである。

磯右衛門は、この絵を掛軸に仕立てて、その脇に「異人たまごをねだりて書申候」と添え書きしている。

はたして外国人との交流が、その後の磯右衛門の人生にどのような影響を与えたのかは分からぬが、こうした交流を通じて横浜の人びとが外国人を身近なものに感じるようになつていったといえるのかも知れない。

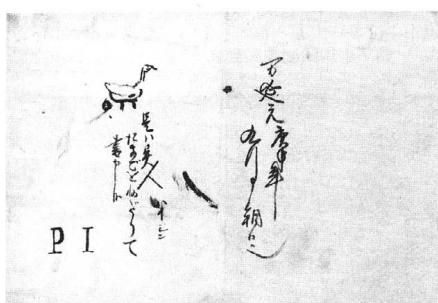
台場の建設と横須賀製鉄所

磯右衛門がさまざまな事業に関係するようになつたのは東京湾内の各地で台場が建設されるようになつてからのことであった。磯右衛門が台場建設に初めて関係したのは嘉永六年（一八五三）九月のことである。この時、彼は品川台場建設に使用する木材と石材を磯子村から品川まで運んでいる。当時の記録（②）によれば磯右衛門は仲間とともに磯子村村民

門も幕府の実施した入札に参加したものと考えられる。

また、品川台場建設後は神奈川沿岸に設置された神奈川台場の建設にも従事し、開港後は居留地の石垣の建設にも携わっている。こうして彼は幕府が計画する建設工事の請負業者として名を知られるようになつた。

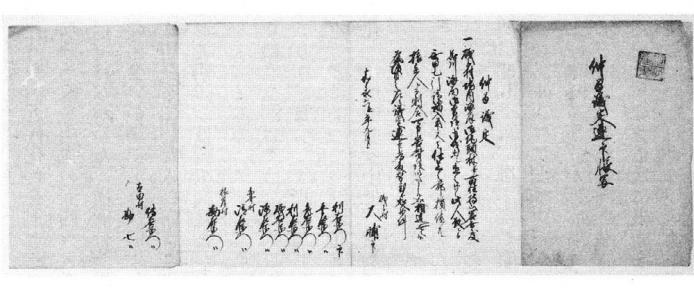
さらに、慶応二年（一八六六）には横須賀製鉄所の建設工事に従事するようになり、この工事に参加したことが、その後の彼の人生に大きな



PI



①



②

影響を与えていくことになった。また、この工事は幕府直営の造船所をフランスの技術を導入して作るために行なわれ、多くのフランス人が建設現場で働いていた。

そのため日本人とフランス人とがさまざまな形で交流することもしばしばで、磯右衛門が石けんを製造するようになったのもフランス人から石けんの効用を聞いたからと伝えられている。また、(3)は慶応四年に日



仮合同で実施された横須賀製鉄所の運動会の様子を描いた磯右衛門の絵であるが、横須賀製鉄所建設現場での日仏交流の一端を伝えるものであらう。

レンガと油の製造

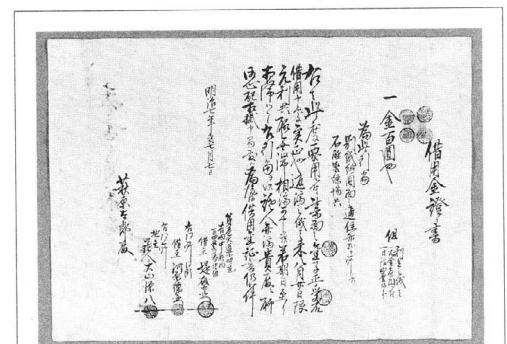
磯右衛門が「公共事業」の建設請

負業者から転身を遂げたのは明治時代に入つてからであった。その始まりはレンガと灯台の点灯用油（菜種油）の製造からであった。彼が、レンガや油の製造に着手したのは横須賀製鉄所の建設がレンガによって作られていたことと日本最初の洋式灯台である観音崎灯台が横須賀製鉄所で作られたからであった。

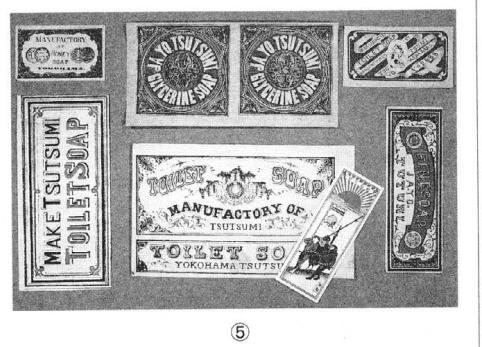
おそらく彼はレンガと油の製造が有望な産業になるという情報を横須賀製鉄所の関係者から入手したものと思われる。しかし、こうした彼の思惑は必ずしも的中せず、明治六年（一八七三）にはレンガと油の製造から手を引くことになる。残念ながらレンガ製造についてはよく分からぬが、油の製造中止は灯台で使用される油が植物油から鉱物油に変わったことが背景にあるものと考えられる。こうしてレンガと油の製造から撤退した磯右衛門は最終的に石けん製造に乗り出していくことになつた。

石けん製造への道

磯右衛門が石けん製造に成功したのは明治六年のことであったが、石けんを作るまでは大きな困難があった。磯右衛門が明治一八年（一八八五）に記した『石鹼製造経歴取調書』によれば、石けんを作ろうと決めたものの、詳しく製法を教えてくれる外国人もなく、製法を記した本も入手できなかつたようである。そのため、彼は実験を繰り返し、ようやく



(4)



(5)

明治六年に至つて石けんらしきものを作ることに成功している。

さらに、製造する石けんの種類も増加し、現在も多種多様な堤石けんのラベルが残っている。(5)。

一方、この頃から工場で働く賃労働者も増加し、「就業規則」や賃金についての取り決めも作られていった。また、堤石けん製造所には各地で化粧石けんの製造に成功している。現在では家庭でも簡単に作れる石けんではあるが、詳しい製法を知らぬ磯右衛門にとって、その道程は大変なものだったのである。また、この頃の彼は資金繰りにも困っていたようで、御子孫の家には多数の借金証文が残っている。(4)。

堤石けんの経営が安定するのは明治一〇年代に入つてからで、明治十四年には販売額が二万四千円を超えるに至つている。また、この頃から各地で開催される博覧会で堤石けんは優秀な成績を収め、堤磯右衛門の名は全国に知られることになった。

堤石けんは経営を悪化させていくことになった。こうした堤石けんは明治二三年（一八九〇）五月に製造を停止した。また、磯右衛門も明治二四年一月二八日に病に倒れ、その波乱の人生に幕を降ろすことになるのである。（西川武臣）

展示
余話

「世界漫遊家たちの ニッポン」展余話

前回の「世界漫遊家たちのニッポン——日記と旅行記とガイドブック」展では、例によつて「あれも出したい、これも見せたい」症状が出て、展示資料がひしめくことになつた。それでも展示会場や図説（八頁の刊行物案内参照）ではふれることができなかつたことや、開催中にわかつて記しておきたい。

語り、出版して倦むところがなかつたからである。

国人ディレクトリにも翌年度版に初めてマクラウドの名が登場し、同業者地にキュリオ商人として記載されている。

に初版が発行されており、所蔵機関
が三ヵ所あげられている。刊行を裏
付ける資料として、同年七月に横浜
の英字新聞三紙に新刊広告がでてい
ることまではつきとめることができ
た。一八八四年刊の第二版は国際日
本文化研究センターにあり、展示に
出品していただいた。

（巻頭に「著者が前に出したガイドブックからの抜粋」とあるが、その前書は未見）
おもに名所案内を記し、それに名所の版画図版をつけた小冊子である。マクラウドは日本について数冊の珍書を残している人物であるが、そのほとんどは私家版で、発刊のたびにジャパン・ヘラルドなどの新聞社などに贈っていたらしく、時々小さな記事が掲載されている。この小冊子も、「あの疲れを知らぬマクラウド氏がまた新刊を出した」と多少揶揄気味に紹介されている (*Japan Daily Herald*, 1879.7.18)。というのも、彼の年来の旅と研究は、日本人のなかにユダヤ人の末裔の証を見いだすことに費やされており、その自説を

と調査に時間を割いたという。
上記のガイドブックの記事から半
年後の一八八〇年（明治二三）一月
二〇日、同じジャパン・ディリリー・
ペラルド紙に、ヨコハマ・キュリオ・
マークの広告が出ている。中央の図
柄は、『朝鮮とイスラエルの失われ
た十種族』の表紙に金色で刻印され
た図版と同じで、そこにマクラウド
の名前が見える。同年四月一五日居
からは、自分の著作も加えた広告
（図参照）を出している。店の場所は
は居留地一八番（本町通り側）。外

日本で人生を終えたという
キーリングのガイドブックの初版

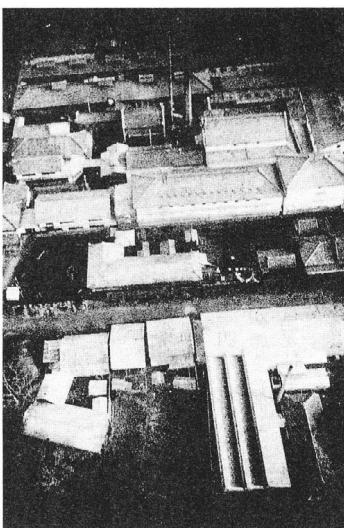
れたのは、一八八一年（明治十四年）のことであり、これ以後出版されたガイドブックのなかには、単にそのダイジェスト版にすぎないようなものもあつた。キーリングのガイドブックもそのような類のものとして扱われる傾向があつたが、展示準備の調査のなかで、実はキーリングの方が一年早く出版されていることが判明した。アメリカの『ナショナル・ユニオン・カタログ』——一九五六年以前刊行書』によれば、一八八〇年

日本」と題して売り出されているマイクロフィッシュのシリーズに入っているのであった。

まだマイクロフィッシュが手元に届いたばかりで十分に見る時間がないうが、内容構成は四年後の第二版と大差ないようである。第二版は内容が多少改訂されているのと、付録が大幅に追加されていることがわかる。

初版の序文の日付は一八八〇年二月。横浜、東京、京都などの個別のガイドブックは良いものがすでに出ているが、そういったものをコンパ

マイクロオーディションで入手可能であること、またその連絡先も知ることができた。その先の話は省略するが、要は、ハーヴィード大学図書館蔵書を基本にして「アジア関係洋書――日本」と題して売り出されているマ



1910年の茂木系製糸、岡崎の三龍社
／撮影法は不明
『風雪九十年 三龍社史』(1991年)より

列化することよりも、通常おこなわれる流動的資金の供与が系列化に作用するからである。しかし、信勝社や持田製糸のように、通常の売込商対製糸家の関係以上の要素をもつた売込商系製糸はたしかに存在するのであって、さらなる調査の進展によつて、茂木・原・小野・若尾の大売込以外の小規模な売込商が関与した事例も判明することと思われる。

製糸業進出の契機について

さて、『横浜市史』では、売込商

が製糸事業に進出する契機を、「様々にこそ求められそうである。実際『横浜市史』でも、原合名の名古屋・富岡両製糸場の蚕種配布を中心とする養蚕家の掌握と優等糸製出を指摘し、あわせて三龍社の優等糸製出も指摘している。また原合名の各製糸場は優等糸製出につとめ「經營規模の拡大はさほどおこなっていない」とする。これは全国的規模で経営拡大をはたす諏訪系大製糸(普通糸製糸)と比較しての評価であるが、最終的には原の各製糸の「非拡大の理由は不明」として結論的にはあいまいに終わっている。

第1表により売込商系製糸経営の設備金数の変化をみよう。確かに原合名の各製糸場は、顕著な設備拡大をはたしていない、富岡は三井から継承した規模を拡大せず、また名古井の製糸事業を継承する他律的形態(原合名=富岡・名古屋・大崎・三重)、②原との対抗関係(若尾)、③優等糸製出のため(原合名・茂木=三龍社)。

②については、一九〇一年に原合名が三井家から製糸場を引き継ぐことに呼応するかのように、若尾が翌

年に大製糸場を建設したこと、若尾系製糸の産出する生糸(一九〇四年)が、若尾商店の全取扱高(一九〇一年)のうちの、二五・八パーセントを占めるという、圧倒的に高い比率にあることを評価のことであるう(原は七・五パーセント、茂木は四・六パーセント)。したがって茂木・原の場合の「積極的」動機としては、(3)にこそ求められそうである。

三龍社は日新館を引継ぎ、一举に三

千金近くまで金数を拡大し、かつ数社の二者で、とくに三龍社である。三龍社は日新館を引継ぎ、一举に三

年後半減、という大きな変化を見る。このことには三龍社の経営にみられる二重構造に理由があるのであるが、紙数も尽きたので以降の検討は次号でおこないたい。

(平野正裕)

第1表 横浜生糸売込商系製糸経営の設備金数

単位: 釜

	茂木				原				小野				若尾			
創立年	【1886】	【1880】	【1897】	【1909】	【1873】	【1893】	【1872】	【1896】	【1871】	【1887】	【1905】	【1895】	【1903】	【1903】	【1883】	【1892】
1893	90	100			300	200	324		200	284					105	
1896	90	178			460	200	530	472	200	555		208			116	1,146
1900	254	240	236		400	200	512	450	200	304		200			116	1,545
1905	180	110	466		500	220	474	300	196	100		240	195	904	276	1,355
1908	200	120	457		550	220	470	350		216	144	250	273	1,328	276	917
1911	200	120	518	164	872	200	470	500		288	274		275	1,328	276	603
1915	269	140	826	194	985	200	560	620		360	284			1,328	320	
1918	400	244	932	300	984	200	520	620		360	460			708	470	
1922		250	2,669		892	200	520	668		328	504				468	
1925			1,438		734	200	520	648		330	520				397	
1928			1,449		632	200	568	638		326	520					

資料：農商務省編『全国製糸工場調査表』第1次～第6次、『全国製糸工場調査』第7次～第11次。

三龍社は三龍社「事業報告書」(ただし1925・28年については、「岡崎地方ニ於ケル製糸業ノ沿革」三龍社蔵)による。信勝社は1900年以降勝野商店「営業報告書」(勝野正彦家所蔵)より。持田・《盛進社》の1911年までは、持田初治郎著「事業経営録」末尾の表より。

注1：イタリックは前提となる製糸場の金数。茂木製糸→旭社/原富岡→富岡製糸場(三井)/原名古屋→名古屋製糸場(三井)/大崎→大崎(三井)。なお、三井から原商店が引き継いだ三重製糸場は短期間に伊藤小左衛門に売却されているため省いた。日新館が茂木傘下になった時期は不明。

2：小野製糸の()の数値は、結社「小野社」の金数。

3：日新館の1922年の数値は三龍社日新館製糸場。三龍社の数値には加えていない。

4：製糸場下の()の所在地は、本工場の所在地。

閲覧室から

横浜開港資料館所蔵 聖書資料(3)

新約全書 引照 前編	横浜 大英國聖書会社 明治一三 (一八八〇)年 和装 活版 20cm 1冊(P.1-418) 英文書名 "Reference Testament"
新約全書 引照 後編	横浜 大英國聖書会社 明治一 三(一八八〇)年 和装 活版 20cm 20cm 1冊(P.419-750) 英文書名 "Reference Testament"
*馬可伝 新約聖書	[翻訳委員社中訳] 横浜 米国聖書会社 明治一四(一八八一)年 和装 活版 20cm 1冊(88P.) 書名は題簽・見返による [193.6-5]
与波子で無	[アラカン訳] 横浜 [Bible Press] 明治一五(一八八二)年 18号 1冊(P.37-49) 英文書名 "Gospel of John" [193.6-6]
民数記略 旧約聖書 訓点	横浜 北英國聖書会社 明治一九(一八八二)年 19号 1冊(13P.) [193.2-1]
列王紀略 旧約聖書 上	横浜 北英國聖書会社 明治一九(一八八二)年 19号 1冊(13P.) [193.2-4]
馬可譏義 訓点	[花之安著] 横浜 倫敦聖教書類会社 明治一五(一八八二)年 21cm 1冊(78P.) [193.6-7]
請求番号を「」で示しましたので、 閲覧室でご覧ください。(石崎康子)	

▼展示

- (1) 「石けん工業の創始者一堤磯右衛門の生涯」10/30㈬～2/2㈰ 日本で最初に石けん製造に成功したと伝えられる堤磯右衛門の生涯を、子孫の家に残された資料を中心に紹介する。
- (2) 「館蔵資料展横浜の近代 Part III」 2/7㈮～4月下旬 開港期から明治・大正にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時々の姿を表現する特徴的な資料によってあとづける。またあわせて絵葉書コレクションなどの新収資料も紹介する。

▼講座

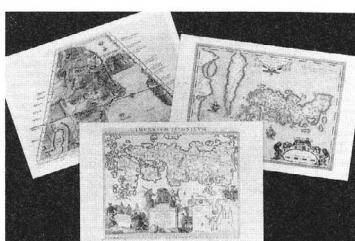
前期 平成9年1/25・2/1・2/8・2/15・2/22、後期 3/1・3/8・3/15・3/22・3/29 いずれも土曜日、午後2時から(1時30分開場、2時開講)

会場 当館講堂 講師は当館調査研究員でテーマは未定(「広報よこはま」12月号に掲載予定)。受講料 各期2,500円 募集人員 各期50名(往復葉書でお申し込みください。前期か後期かも明記のこと)

▼寄贈資料

(1) 横浜市電車バス並貿易復興祭り記念券電車バス共通乗車券ほか 1点(東京都江戸川区 関根八郎氏)

資料だより



16～18世紀にヨーロッパで発行された絵はがき「歐洲版 日本古地図」
3枚1組300円 当館・受付で販売。

都復興事業概要(東京市役所編 昭和7年3月刊)ほか 21点(港北区綱島台 飯田助氏)

▼寄託資料

(1) 金井佐衛樹家所蔵文書 513点(金沢区朝比奈町 金井佐衛樹氏)

▼出版物案内

図説『世界漫遊家たちのニッポン一日記と旅行記とガイドブック』 A4判 64頁 定価1,000円(税込)

はじめに・凡例・図版・第1章 世界旅行の幕
開け・第2章 国内旅行のパスポート・第3章
旅行ガイドブック・第4章 世界漫遊家の旅行
記・第5章 横浜とその近郊・文献・略年表



- (2) 『戦時下逗子の朝鮮人労働者』(逗子市朝鮮人労働調査委員会 1995年)ほか 148点、絵葉書(明治・大正・昭和期)61点(港北区錦が丘 今井清一氏)
- (3) 『万国新聞紙』(複製) 2集、11集 ほか(中区根岸旭台 高木俊彦氏)
- (4) 『帝都復興区画整理誌 第一編 帝